

適用拡大登録

区 分	殺虫剤
農 薬 名	グランドオンコル粒剤
種 類 名	ベンフラカルブ粒剤
登 録 番 号	第 20317 号
登 録 会 社	OATアグリオ株式会社
登 録 日	令和 4 年 12 月 21 日

登録内容

農薬登録申請書第7項中、以下を変更し、【変更後】のとおりとする。

・作物名「稲（箱育苗）」の使用量に「高密度には種する場合は1kg/10a（育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）1箱当り50～100g）」、使用時期「移植当日」を追加する。

## 【変更後】（変更する作物のみ抜粋）

作物名	適用病害虫名	使用量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ベンフラカルブを含む農薬の総使用回数
稲 (箱育苗)	イネミズヅウムシ イネドロオイムシ ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ ニカメイチュウ イネツトムシ イネシンガレセンチュウ	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当り50g	移植3日前 ～移植当日	1回	育苗箱の上から均一に 散布する。	1回
		高密度には種 する場合は 1kg/10a（育苗 箱 (30×60×3cm 、使用土壌約 5L) 1箱当り50 ～100g)	移植当日			
	イネカラバエ フタオビコヤガ イネヒメハモグリバエ	育苗箱(30×60×3cm、 使用土壌約5L) 1箱当り50g				

第8項の(3)を以下のとおり変更し、変更後のとおりとする。

## 【変更】

## (3) 稲の育苗箱に使用する場合

- ①育苗箱の上から均一に散布し、葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水して田植機にかけて移植すること。
- ②育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）1箱当りに乾糶として200から300g程度を高密度には種する場合は、10a当りの育苗箱数に応じて、本剤の使用量が1kg/10aまでとなるよう、育苗箱1箱当りの薬量を50から100gまでの範囲で調整すること。
- ③軟弱徒長苗、むれ苗、移植適期を過ぎた苗などには薬害を生じるおそれがあるので注意すること。
- ④稲苗の葉が濡れている場合薬害を生じやすいので、葉に付着している露を払い落としてから薬

剤を散布し、軽く散水すること。

- ⑤誤って過剰に使用すると葉先枯れ等の薬害を生じることもあるので、所定の使用量、使用方法を厳守すること。
- ⑥本田が砂質土壌の水田や漏水田、未熟堆肥多用田の場合は使用をさけること。
- ⑦本田の整地が不均整な場合は薬害を生じやすいので、代かきはていねいに行い、移植後田面が露出したりしないように注意すること。移植後は直ちに湛水し、極端な浅水、深水はさけること。また、深植にならないように注意すること。
- ⑧本田への移植後低温が続く、苗の活着遅延が予測される場合は使用をさけること。また、移植後極端な高温が続くと予測される場合も使用をさけること。

**【変更後】**

- (1) 本剤を使用した場合には、カルボスルファンを含む剤は使用しないこと。
- (2) 使用量に合わせ秤量し、使い切ること。
- (3) 稲の育苗箱に使用する場合
  - ①育苗箱の上から均一に散布し、葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水して田植機にかけて移植すること。
  - ②育苗箱（30×60×3cm、使用土壌約5L）1箱当りに乾粒として200から300g程度を高密度には種する場合は、10a当りの育苗箱数に応じて、本剤の使用量が1kg/10aまでとなるよう、育苗箱1箱当りの薬量を50から100gまでの範囲で調整すること。
  - ③軟弱徒長苗、むれ苗、移植適期を過ぎた苗などには薬害を生じるおそれがあるので注意すること。
  - ④稲苗の葉が濡れている場合薬害を生じやすいので、葉に付着している露を払い落とししてから薬剤を散布し、軽く散水すること。
  - ⑤誤って過剰に使用すると葉先枯れ等の薬害を生じることもあるので、所定の使用量、使用方法を厳守すること。
  - ⑥本田が砂質土壌の水田や漏水田、未熟堆肥多用田の場合は使用をさけること。
  - ⑦本田の整地が不均整な場合は薬害を生じやすいので、代かきはていねいに行い、移植後田面が露出したりしないように注意すること。移植後は直ちに湛水し、極端な浅水、深水はさけること。また、深植にならないように注意すること。
  - ⑧本田への移植後低温が続く、苗の活着遅延が予測される場合は使用をさけること。また、移植後極端な高温が続くと予測される場合も使用をさけること。
- (4) れんこんに使用する場合
  - ①湛水状態で所定量の薬剤を圃場全面に均一に散布し、土壌中に均等に分布するようにすみやかによく混和すること。処理後14日間は落水・かけ流しはしないこと。
  - ②ハウス栽培には使用しないこと。
  - ③条掘り（筋掘り、残し掘り）したれんこん田には使用しないこと。
  - ④漏水田では使用しないこと。または、漏水対策を行い隣接田への流出を防ぐこと。特に、7～12月は収穫前のれんこん田が多く、隣接田へ漏水やドリフトすると作物残留のおそれがあるので、この時期の使用はさけること。
  - ⑤薬剤処理後6カ月間（180日間）は収穫しないこと。
- (5) ミツバチに対して影響があるので、ミツバチの巣箱及びその周辺にかからないようにすること。
- (6) 蚕に対して影響があるので、周辺の桑葉にはかからないようにすること。
- (7) 本剤の使用に当っては、使用量、使用時期、使用方法などを誤らないように注意し、特に初めて使用する場合には病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。